

大阪市立大学「大学史資料館(大学博物館)」の設立をめざして

「大学史資料館」構想

学長 荒川哲男

都市大阪の発展を牽引する「知の拠点」である大阪市立大学、その魅力を発信する場として、杉本キャンパスに「大学史資料館」(大学博物館)を開設することを構想しています。また、2020年の創立140周年を迎えるにあたり、〈歴史・伝統×感謝・誇り×革新・飛躍〉を掲げ、諸事業を計画していますが、そのひとつとして140周年展を実施します。これをその先の「大学史資料館」の開設へのステップと考えています。

140周年展の実施、「大学史資料館」の開設にむけ、ご協力賜りますようお願い申し上げます。



2017年末、荒川哲男学長から、「大学史資料館」設置の検討を進めるよう学術情報総合センター所長に指示があった。そこで、数名からなる作業部会を設け、創立140周年展を含めて検討を進めることになった。

学長の意向は、在学生や来客者、また広く市民に対し、大阪市立大学の歴史を知ってもらうことのできる展示室を杉本キャンパスに作りたいというものである。

大学博物館については、1996年に国の学術審議会が『ユニヴァーシティ・ミュージアムの設置について(報告)』をまとめ、学術資料の保存・活用、学術情報の発信、研究成果を社会に示す窓口と位置づけている。

本学では、2007年度に大学史資料室運営委員会が大学博物館の必要性を提起し、2008年3月に『大阪市立大学の「大学ミュージアム」構想』をまとめている(『大阪市立大学史紀要』第2号)。また大学史資料室では、学内の学術資料の調査を進め、企画展を2回にわたって実施した(2009年2月~2010年5月、第1期・第2期)。その後、大阪市立大学と大阪府立大学がまとめた『「新・公立大学」大阪モデル(基本構想)』(2015年)のなかで、「大学博物館の設置」が盛り込まれるに至る。

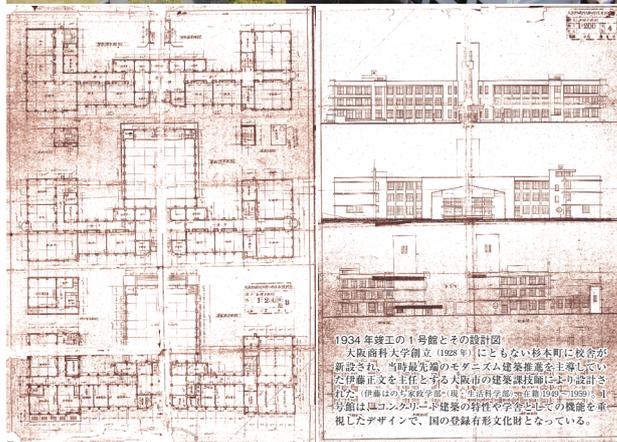
そして、冒頭に述べたように、2018年度に作業部会での検討に進んだ。学長・副学長との懇談を通して、大学史展示をひとつの柱とし、あわせて学内にある学術標本や研究資料を収蔵・展示する大学博物館を構想するこ

とを提案し、基本的方向として了解された。

2018年6月には、学内の学術資料の所在調査を各部署に依頼し、その回答にもとづき、10月から学内の資料調査を開始した。全容はまだ明らかでないが、それをふまえ、『大阪市立大学博物館基本構想』をまとめ、2019年2月に学長に答申した。また、博物館設立にむけての機運を高め、学内資料の所在確認を促進するため、パンフレットを作成し教職員に配布した(写真下)。

そして2019年度から、「(仮称)大学史資料館設立準備委員会」の設置が認められ、体制を拡充し、140周年展の準備と、大学博物館の基本計画の検討にあたることとなった。現在は、来年2020年11月3日を会期初日とする予定の140周年展、その展示計画立案を進めている(展示室は1号館1階の旧法曹養成専攻院生室149㎡)。

ニュースレターでは、今後、140周年展や大学博物館の準備状況をお伝えしながら、主に学内の諸資料を取り上げ紹介していくことにしたい。

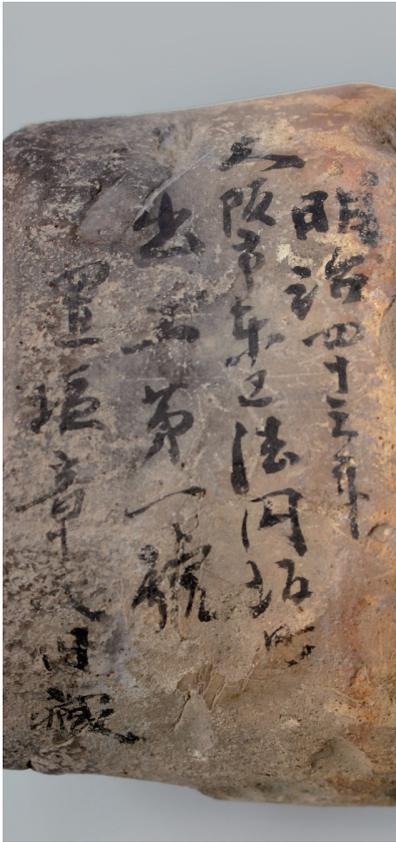


1934年竣工の1号館とその設計図
大阪商科大学創立(1928年)にもない杉本町に校舎が新設され、当時最先端のモダニズム建築推進を主導していた伊藤正文を主任とする大阪市の建築課技術員により設計された(伊藤の卒業生である建築家坂倉準三が設計)。1号館は坂倉が「二層建築の特許を学芸院に譲渡した」として重視したデザインで、国の登録有形文化財となっている。



140周年展と大学史資料館(大学博物館) 実現にむけてご寄附のお願い →大阪市立大学夢基金
お申込み時にTOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室(夢基金担当) TEL:06-6605-3415
<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbt2s>

編集発行
(仮称)大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階 大学史資料室内
TEL: 06-6605-3261



山根徳太郎の難波宮発見を導いた「出土第1号」瓦

この蓮華文軒丸瓦は、所在不明だった難波宮の発見を導いた資料である。大化改新の舞台となった7世紀の難波長柄豊埼宮（前期難波宮）の焼失後、8世紀前半に聖武天皇が再建した後期難波宮に葺かれた瓦である。

戦後、大阪城の南に難波宮跡があることを明らかにしたのは、法文学部教授であった山根徳太郎¹⁸⁸⁹⁻¹⁹⁷³である。科学研究費が採択され、山根が難波宮の調査に着手するのは、定年退職した1952年である。なぜ山根は難波宮をめざしたのか、その動機となったのがこの瓦である。

この瓦は、1913年、陸軍用地であった法円坂¹⁸⁸¹⁻¹⁹⁶⁸で工事中に出土したものと思われる。陸軍技師の置塩章（のち建築家として独立）は、これが奈良時代のもので難波宮の所在を示すと考えた。1919年、大阪市職員として大阪市民博物館の開館準備に従事していた若き山根は、置塩を訪ね、瓦を見せられ、難波宮の所在を確信する。

それから33年後の1952年、難波宮の調査を始めるにあたり、山根は神戸に置塩を訪ねた。置塩がもっていた2点の瓦は防空壕のなかで埋没していたが、掘り出され、

大学に寄贈された。山根は、「明治四十三年／大阪市東区法円坂町／出土第一号／置塩章氏旧蔵」と墨書する（出土年次は誤り）。残念ながら、もう1点の重圏文軒丸瓦は所在不明である。

このエピソードは山根の『難波の宮』（学生社、1964年）に詳しい。しかし、大学に寄贈された2点は、山根が1919年に見たものではなかった。それは、いま大阪歴史博物館に展示されている2点である。これらが大阪市民博物館に出品された1920年に山根は大阪市を退職し、その後を知らなかったが、そのまま大阪市に寄贈されていた。置塩のもとには良好な資料が複数あったのだろう。大阪市大の瓦は、大阪歴史博のものより完好な資料である。置塩も1923年に陸軍を辞め兵庫県に移るが、蓮華文・重圏文の瓦各1点を手元にとっていたのである。

大阪市大のこの資料は、山根が難波宮の所在を確信した1919年に見た資料そのものではない。が、同時に出土したものと思われ、山根が難波宮の調査に邁進する上で弾みとなったに違いない。（文学研究科 岸本直文）



準備室だより

◆2019年4月10日、第1回の（仮称）「大学史資料館」設立準備委員会を開催しました。委員会のもとに、大学史資料館の設立準備を着実に進めるため、文系（大学史・文系資料）・理系（理系資料・古人骨）、および展示空間の設計を担うワーキンググループを設けています。5月10日・20日・27日、6月3日・17日、7月22日に、3つのワーキンググループが集まり、検討を進めてきました。現在は、来秋予定されている140周年展の実現に向けて、それぞれ展示案を固める作業を行っています。また、このニュースレターのほか、HPでの情報発信についても準備中です。

（仮称）「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター6階 大学史資料室内 TEL: 06-6605-3261